

多摩川の写真コンテスト応募作品からみた撮影者の風景の捉え方に関する考察

○浅井美里 [東京農業大学] △栗田和弥 [東京農業大学]

キーワード：河川、風景、写真、被写体

多摩川は東京都を流れる代表的な河川の一つであり、東京のみならず山梨県と神奈川県にもまたがる全長 138 km の河川で、都市で暮らす人々にとって身近な自然環境の一つである。現在、多摩川ではどのような風景が利用者に捉えられ、そこではどのような活動が行われているか。季節や時刻、地域ごとに利用や見られている風景は異なると考えられる。

本研究は多摩川を題材とした写真から人々の多摩川の利用や、撮影者が何を被写体として多摩川を写し出しているか分析することを目的とした。写真は、ボランティア団体「ラブリバー多摩川を愛する会」が主催しているコンテスト「ラブリバー多摩川写真展」の過去 6 年間の応募作品（写真）1,149 枚を使用した。この研究対象の特徴は、コンテストの入選作品ではなく、応募作品そのものが公開されていることにある。一般的にコンテストは審査されて限定された写真のみが公開されるが、その場合には写真数（研究対象サンプル等）としては適しているとは必ずしもいえない。本対象は限定される前の写真が分析できることに着目し、撮影者の風景の捉え方の傾向を明らかにすることができると思われる。

日本の自然観・風景観の変遷に関する考察

○中村拓也 [東京農業大学] △栗田和弥 [東京農業大学]

キーワード：自然観、風景観、自然環境、系譜、変遷

わが国の自然環境、あるいは風景地や景観に関して論じた著書は少なくない。こうした著書は日本の自然観・風景観あるいは延いてはその価値観を考える上で重要な一要因となっていることが考えられ、特に明治期の日清戦争や日露戦争にかけた転換期に多くの著作およびその研究が知られている。しかしその後、現在までの変遷をたどった研究は多くはない。他方で、東日本大震災を始めとする時代の節目ともいえる転換期を迎えていると考えられ、復興をなども含めた自然観・風景観のあり方が問われているということができよう。そこで本研究では著書により日本の自然観・風景観の変遷を解明することを目的とし、明治以降の「風景」「景観」「自然環境」をキーワードとして見いだされた著書から著者の考えを分析し、その変遷をまとめていく。現代における自然観・風景観は明治、大正時代に比べて多様化・細分化しており著書の内容も異なってきたことが考えられるが、具体的にその系譜を明らかにし考察する。